

Title	人口政策について
Author(s)	高田, 保馬
Citation	経済論叢 (1937), 45(1): 1-17
Issue Date	1937-07-01
URL	https://doi.org/10.14989/130980
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷五十四第

行發日一月七年二十和昭

論叢

人口政策に就いて……………文學博士 高田保馬
 農作物の收穫保險に就いて……………經濟學博士 八木芳之助
 現代變革期に於ける日本國民經濟學の意義……………經濟學博士 石川興二

時論

統制經濟と農山漁村對策……………經濟學博士 蜷川虎三

研究

ハロツドの景氣循環論……………經濟學士 飯田藤次
 普通銀行の支拂準備金……………經濟學士 上野淳一

說苑

安民主義的統制の必然……………經濟學士 大塚一朗
 取引税の一論據……………經濟學士 柏井象雄
 會計學に於ける財産及び資本……………經濟學士 尾上忠雄
 建築統計……………經濟學博士 沙見三郎

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

經濟論叢

第四十五卷 第一號 (通卷第百六拾五號) 昭和十二年七月發行

論叢

人口政策について

高田 保馬

一

茲に人口政策といふのは、所謂人口問題に對する對策である。人口問題といふものが少くも其近代的なる形態に於ては、二の方面をもつてゐる。一は人口過剰の問題であり、他は人口過少の問題である。かくの如くに表現して來ると、人口問題は全く反對してゐる二の方面を含み、それに統一的なる對策を提示することは全く不可能であるかに見える。けれども、これは一面からの觀察である、他面からの、而して恐らく更に根本的なる觀察からすれば、さういふ對策の提示が不可能であるとは思はれぬ。

近年の日本についてはかつて、人口過剰の問題が取り上げられた。實際的には、一面人口食糧問題として、他

面失業問題として。理論的にはマルサス人口法則にもとづく絶對的人口過剩論として、またマルクス主義の立場からする相對的人口過剩論として。これらの各方面を一々分析するつもりはないが、たゞ大體についていふと人口食糧問題としての人口問題はほゞ消滅したともいひ得よう、最近は農産物ことに米の過剩の對策が解決を迫られてゐる姿である。肥料の價格を下げる事が出来るならば——而して肥料の生産が制限せられて居り、電力の價格に低下の餘地があると見られてゐる現状に於ては、それも困難ではない。——米作だけについてみても、なほ二倍又はそれ以上の増收が難事ではないといはれてゐる。これにつれて過剩人口の問題が失業の問題としてのみ存在するといふべきであらう。人口問題がたゞ此過剩人口の問題といふ一面のみを有するならば、問題は實質に於て社會問題となつてしまふ。

人口問題のかゝる取扱に對して、私はかつて、其眼界の狹隘を非難したことがある。人口問題には他の重要な一面がある。それは民族の立場から人口を見ることである。率直にいへば、すべての政策は何等かの世界觀乃至社會觀を前提とする。けれども、これらを學問的に確立することは形而上學のことであるとともに、かういふ學問の範圍にあつては、結局常に相對立して最後まで一を他に還元することの出来ない二又は若干の立場がある。政策的主張が統一をもちうる爲には、さういふ學問的究明を形而上學にまかせ、若くは最後の根據を宗教的確信にまかせることが、一の方法であると共に、更に恐らく更に多くの客觀性をもちうる主張としては次のことがあり得るはずである。一定の民族に於ける支配的なる要求、いはゞ客觀的なる民族意識から出發する。この民族意識といふものは、その民族の歴史的なる傳統に根ざし、民族の成立と切りはなしがたきものであるとともに

に、また横には世界の思潮そのものの此民族に於ける反映である。時代と傳統との此民族に於ける交叉であるともいひ得るであらう。私は現代の日本に於ける此民族意識、つまり今の日本民族を根本に於て動かしてゐる要求として次のものをあげ得ると思ふ。一は民族としての日本の自衛、又は更に進みて、民族の擴充の要求、他は此民族の成員の生活の要求。個人の生命と民族の存續、此二の要求として、表現しうるであらう。かゝる立場に立つとき、民族生命の擴充の要求といふものが此二面を含む根本として考へられうる。この視角から見るとき、人口問題は全く民族の問題となる。民族生命の擴充の爲に、人口の上に如何なる政策が加へらるることを要するか。これが民族問題としての人口問題の内容である。

今や、西歐文明の没落が云々せられようとしてゐる。此没落の可能又は危険といふことは、何故に問題となつてゐるか。いふまでもなく、人口増加の停止、又は減少が目前に迫つてゐるからである。死亡率の減少には限度があり、出生率の低下にはそれがない。出生率減少の傾向の進行するところ、各民族の人口の減少とならざるを得ないであらう。かういふ見方にたつ限り、人口問題は出生率のやゝもすれば減少して、人口過少を來すのではないか、この形勢を如何にして防止するかの問題となるであらう。勿論これは、民族的立場に立つ場合に於ける人口問題の全部ではないが、少くも其最も重要なる方面であらう。而して、私共は日本に於てもすでに、此意味に於ける人口問題が眼前に迫つてゐることを認めざるを得ぬ。更に進みていふと、過剰人口即ち失業の問題とも、一面から見ると、民族問題の中に吸収せられてしまふ。これは次の意味に於てである。日本の民族が其民族生命を擴充してゆかうとするならば、成員なくして民族なく、成員の生活を離れて民族の生活はない。かうして

人口過剰の問題と人口過少の問題とが一面相反するが如く見えて、それらに對して統一的なる答解の與へらるる餘地がある。

二

民族生命の立場から。これが今私がとらうとする見方である。かゝる立場から見ると、日本の人口を自然のままに放任せず、これに意識的なる統制を加へようとするとき、如何なる政策が取らるべきであるか。私はこれに對して、主として量の方面からこれを考へよう。さうするとき問題は、此人口總量に關する政策と、人口の分布に關する政策とに分れる。

今日、民族生命の立場から見るときに、人口の減少が最も避くべき事實であることは、いふまでもない。文明の爛熟は白人の出生率を減少せしめ、其前途に一抹の暗雲を投じた。日本の民族が彼等に對する最後の強みは人口の増加率にあるといふのが無理であらうか。私がかつて産めよ殖えよ、國中くわちに充てよ、といつたのは全くかゝる有色人の將來を考へたからに外ならぬ。たゞかういふことを主張して來ると、人口過剰をどうするか、といふ問題が投げらるであらう。これに對する私の答解は大體次の如きものである。

人口過剰の對策には二の方針がある。一は消極的なる方針である。他は積極的なる方針である。前者は産兒制限である。後者は人口の増加の抑壓を企てざる所の對策に外ならぬ。出生の減少を目ざす政策が民族の立場からとりがたきことは、いふまでもない。積極的なる方針には種々なるものがあらう。一時、資本主義組織は没落の前夜にあり、一九二九年以後の世界恐慌は引きつゞき此組織の壊滅にまでつゞくものと論ぜられてゐたが、現前

の事實は此主張を根こそぎに否定した。資本主義組織の究極の運命については、種々なる考察を必要とするにせよ、近き將來の問題としては、今の組織の下に於てなほ人口吸収の政策を講じうべきはずである。さうすると過剩人口に對する對策が、自ら次の如きものとならざるを得ないであらう。一は産業的活動の振興である。二は移植民による海外への發展である。而して此二者については何人も注目を怠らず、國家も亦不斷の努力を拂ひつゝある。けれども、これとならびて、なほ二の方法の存することを忘れてはならぬ。一は社會政策的なる人口政策であり、二は國民の生活水準に關する考慮である。

私はまづ、産業的活動乃至産業的發展について論じよう。戦後に於ける恐慌は著しく失業を増加せしめた。これを今歐米の諸國について論ずることをやめる。日本に於ける失業の統計はないが、一時は推算五十萬乃至百萬といふことであつた。ところがこれは漸次に景氣の恢復につれて新しき勞働人口とともに吸収せられた。此恢復を來したるものが、幾つかの事情とともに、金本位の離脱、滿洲事變頃からの爲替相場の下落及び世界を通ずる軍備擴張の大勢であつたこと、いふまでもない。考へて來ると貨幣制度の工作与軍備擴張との二は、世界資本主義の恐慌からの自己恢復の作用であつた。いはゞ、景氣立直りの必要が無意識的にはあるが、自らそこに導いたといひ得るであらう。日本に於ても、此共通の大勢が實現せられて來たといふに外ならぬ。けれども、此方向によつて、今後どれだけの人口が吸収せられ得るであらうか。それについては、對外の壓迫を考慮に入れねばならぬであらう。即ち、各國に於けるブロック經濟的自給經濟的傾向によつて輸出が著しき障礙に出會ひつゝあることは注目を要する。その上、國內に於ける生活標準は結局徐々ではあつても必然に幾分かづゝ上昇するであら

う。否、物價が金再禁止後、久しく割合に低位に置かれたのであつたが、それが財政の膨脹其他の事情の爲に、急に上昇した。これは輸入にかゝる原料の騰貴に負ふところがあるにせよ、世界的なる上昇の步調に比して餘りに急である。その點は今詳論しない。かゝる状態の間にあつて、産業が愈々増加してゆく人口を吸収しうる爲には、技術の改善、その飛躍的なる發達の外にとるべき方法はない。此點から人口問題の眼目は技術の問題にありとすらいひうるであらう。いふまでもなく日本は資源に乏しい國である、資源に缺乏してゐるから、貿易その他の對外交渉によつて生活の資料を、著しき範圍まで獲得しなければならぬといふのであるから、結局生産の技術的優越、次には生産組織に於ける長所によつてのみ、人口支持力を擴張し得るわけである。而も、此技術に於ける進歩といふことが急には期待しがたいとするならば、此方面からの人口吸収力は、人口増加との相對的關係からみて漸次に窮屈になると見る外はないであらう。

そこで、人口吸収のための積極的方針としては移植民の活動が考へられねばならぬ。此方針の必要は單に人口吸収の點からのみ來るのではないが、それについては後に論じよう。なるほど、明治以來、移植民によつて海外にはけ口を見出したる人口は割合に少い。大體から見て現在に於ける在外の同胞は一年の自然増加人口と略々相匹敵するかと思ふ。けれども、何よりもこれは徳川三百年に亙る鎖國政策の結果に負ふと思はるる國民性から妨げられてゐるところも少くないし、國家の助長保護の十分でなかつたのに負ふところもあるであらう。一方に滿蒙、他方には若干の制限もあるが南米といふ新天地に於ける開拓の地點は、着々として開けつゝある。先だてるものの成功と意氣とによつて後なるものが一定の比率に於て増加するといふ形勢が、漸くにして成り立ちつゝあ

と思ふ。日本人の簡素なる生活と、其技術ことに農耕勞働に於ける技術と、更に背後からこれを保護する資本の力を以てするならば、なほ開拓せらるべき餘地がこれらの諸方面から同胞をまつてゐるはずである。けれども移植民の意義は決してこれらに止まらぬ。これ國家が全力をあげ極度の犠牲を忍びても、それを助長しなければならぬ所以である。これはもとより民族人口の分布の問題とも關聯する。手近には滿洲國に於て、一定の同胞人口を維持するといふことは、國防の點から見て必要なることであると共に、耕地の割當さへ相當のものであるならば、日本人の生活程度が土着の人口に比し高位にあるとしても、移住に適しないことはあるまいと信ぜられてゐる。此見地から、我同胞が各地に移植民として、分布することの有意義なることは、いふまでもない。それによつてまづ商品の輸出と、資本の輸出とが促され、海運その他の活動に對する刺激の與へらるることを思ふときに、移植民としての吐け口の絶對數以外、それは特殊の意義をもつはずである。

けれども、結局、移植民による人口の吸収はどれだけ順調に進行しても、恐らく一年の自然増加の一割をこえ難いであらう。明治の中葉以來農業の人口は殆ど増加せず、年々の自然増加の殆ど全部をあげて都會の商工業に吸収せられてゐるわけであるが、最近に於ける對外貿易の障碍、物價の騰貴はあるにしても、今後それが急速に行きつまる考ふべき積極的理由は見出しがたい。結局、都市産業の人口は大體に於て進行するものと見得るはずである。けれども、これはたゞ大體の議論である。まづ、此吸収が近き將來に於てすら窮屈になると考へねばならず、遠き將來にはどういふ變調を來すかも分らぬ。近き將來のことといふのは、世界の軍擴張競争の停止せらるるときを指し、又停止されなくても、生産力擴充の一わたり完成して、擴張のための生産財需要の急減する場合

をさす。一國の人口政策について十分に安固なる方針を打ちたてようとするとき、全く別の方面に對しても考慮が拂はれねばならぬ。

三

積極的なる對策が過剰人口を取除き得ざるときに、まづ社會政策的なる施設が實行せられねばならぬ。私は今これの内容に立入るだけの餘裕を有しない。たゞ國家權力の作用によつて、所得の再分配が行はれねばならぬ事を認める。まづ就業の機會をもち得ず、従つて、經濟的に收入をもたざるものに對して、なほ仕事を有するにしても、經濟的なる弱者であるが爲に收入の不足するものに對して、其生活を保障するところの政策が打たてられねばならぬ。いはゞ經濟的なる相對的過剰人口を、政治的に過剰人口ならざるものに變形せしめなければならぬ。けれども、これだけを以て、過剰人口の完全なる除却がなし遂げらるるや、これが一の問題として残る。一國の資源と技術と、資本數量と、生産の社會的組織とによつて、一國の生産力、従つて國民所得は定まる。國民所得の階級的分配が此社會政策的方針によつて修訂せらるるにしても、國民所得そのものが一定の生活標準に於て全國民を支持するだけのものであり得るるや如何。事實は常にその甚だ困難なることを示してゐるばかりではない。民族の立場は、人口の不斷なる自然増加を要求してゐる上に、前に假定したるが如き社會政策的施設の進行なほ未だ遅々たるものがある。これらの點からして最後の方策が要望せられて來る。

それは國民的生活標準の合理的統制である。國民生活の實質的低下を伴はざるところ生活標準統制である。私がこれによつて意味してゐるところは次の如きものである。今日各個人の生活内容はすべて各自の殆ど完全な

る自由に委せられてゐる。けれども、其結果國民の生活は合理的に見て極めて不必要なる方面に冗費を投じ、その爲に生活實質上の損害、缺乏を招いてゐる。これに對して、まづ國家は國民生活内容の合理的なる指導に當ることが必要であるばかりではない、進みては強制的に、生活内容のある範圍まで法定することも必要であらう。徳川時代に於ける種々なる法令（禁奢令その他）を單に時代遅れのものとして斥くことも出来まい。別してこのことは、収入の割に多くの生活費を要する階級、過大なる収入の爲に生活程度の高き階級（サラリイメンと資本家階級をさす）について考慮せられねばならぬと思ふ。勿論國家の國民生活内容に關する統制はたゞにかゝる消極的方面に止まることは許されない。今日の國民生活に於て、最も重大なる關心を要する方面は食物ではない。この方面はまだそれほど窮屈ではない。衣の問題はむしろ低下を必要とするほどに、少くも中等階級の水準が高まつてゐる。負擔の多くして而も保健の見地から見て十分でないのは住宅の現状である。國家は單に社會政策的見地からばかりではない、生活統制の見地から見て、此點に根本的なる考慮を拂はねばならぬであらう。更にまた、兵器の充實の爲に年々十億の費用を必要とするならば、それは國防の中心たる人的資材の充實の爲に幾億を惜むべきではなからう。まづ都會に於ける低額所得者、次に農村の爲に國費を以て住宅を改善給與する必要はないか。

要するに、生活標準の無統制なる現状は改められねばならぬであらう。而して國民所得の現状が人口の吸収を困難ならしむる見込のある現状に於ては、此統制を徹底化することによつて、人口吸収の餘地を十分にしなければならぬ。最後にとらるべき強制的的方法としては、課税による政策である。衣住に關して、ある程度以上の生活を不可能ならしむるが如き重税を課することが最も近道である。それと共に、國家はなほ一度、國民の生活内容に

關する指導者であり教師であることを要する。今日の非常時に於て、民族の立場を貫き通さうとするならば、國民に於ける消費のうち、生活實質を損はぬものをすべて廢棄する外はなく、此廢棄は國家權力の力を借ることを最も便なりとする。私が述べようとする人口の總量に關する政策は以上の諸方面を以てつぎる。人口の分布と聯關をもつところの量的問題についてはなほ次に之を論じたい。

四

人口分布の政策については、今まで殆ど之を述ぶる機會を有しなかつた。人口の數量については、出來うる限り多くの人口を吸収し得る方策を講すべきこと、それが爲には、積極的、消極的の各方面に互つて、三四の方針のあり得ることを述べた。而して私は、他のすべての方針の有意義であることを認めつつも、なほ最後の保證として國民生活の統制といふものをあげようと思ふ。けれども人口政策の總量的方面については、これより以上に立入ることを控へよう。而して、人口の分布について論歩を進めよう。人口分布政策に於て考慮すべき方面には數多のものがあるであらう。けれども、第一にあげらるべきものは農村と都市とに於ける分布である。第二にあげらるべきものは階級的分布である。

人口總量の見地からいふならば、民族生命を中心として考へたる場合、多くの人口がすべて生活の安定を得るといふことだけで足るやうに見えるけれども、一たび其分布を考へて來ると、決してそれだけで十分なりとはいへぬ。一の民族は其民族としての現状から考へて、一定の人口的分布を必要とする。

私は今日日本の人口の都會と農村とに於ける分布を考へよう。若し生産力の増加、國民所得の増進、従つて人口

總量の支持のみが問題となるならば、此分布の如き、どうでもいゝことである。ところが今日の現状に於て、かゝる生産力中心の方針が推しすすめられると、どうなるか。いふまでもなく都會人口、ことに大都會人口の間斷なき増加である。明治四十年頃から農村人口は其絶對數の上にさしたる變動を示さない。而してそこに於ける増加人口は次から次へと都市に吸収せられて來た。かくて年々六七十萬から九十萬以上に及ぶ年々の自然増加は殆ど都市人口の増加となつてあらはれた。最近に於ける、農村人口の對全人口比率は四六乃至四七%以下であらう。而も此傾向に放任する限り、農村人口の比率は愈々低下するものと見ればならぬ。これに對して、日本の農村人口の比率はなほ未だ英・佛・獨のそれよりも遙に高い。日本はたゞ、此農村人口の犠牲に於ていはゞ生産力の増加を計る外はないといふ立場から行くならば、資本主義化の工作が、そのままに進展してゆく外はないであらう。けれども、日本の民族にはそれ特有の立場がある。それが有色人種の一に屬するといふことが、民族の前途別して其國防の問題を考ふる場合に慎重なる考慮を必要とする。農村壯丁の體位が以前よりも悪いといつても、都市のそれに比すると著しく高位にある。農村人口は、全人口の五割に充たず、現役壯丁の數は七割を占めてゐる。徴兵検査の結果に徴するに農村壯丁の甲種合格率は都市のそれよりも著しく高い。そればかりではない。農村の壯丁は兵士として有利なる精神的心理的特質を具有してゐる、兵器の機械化がこれと逆の方向の議論を基礎づけるやうに見えても、さうではないといふ意見に、強味が認められてゐる。加之、人口の動態は何物を暗示しつゝあるか。出生率はすでに下降の勢を示しつゝある。日本の民族がいつかは歐洲の各民族と同じくこの潮流にまきこまることの、結局は避けがたい運命であるにしても、出来るだけ遅れてかかる形勢を示すといふことが、

その地歩を確立する所以である。今日、都市の出生率別して大都市のそれは格別に少い。従つて全人口の構成に於て占むる都市人口の割合が増加するほど、全國の平均出生率の減少を見るはずである。それは自ら、人口總量の問題の上にも、此都市と農村とに於ける人口の分布が重要な關係をもつてゐる。その他の點についてはこゝに詳論しまい。とにかくこれらの事情からして、農村の人口をなるべく一定の比率に於て維持する必要があるであらうし、それが困難であるにしても、なるべく農村人口の數を高位に維持する必要があるはずである。而もこのことは、可なりに強き國家權力の作用をまつてのみ實現せらるるはずである。何となれば、今までの政策の方針は無意識的ではあるが、人口の大都市集中を極度に助長してゐるし、これに方向を轉換させることは、餘ほどの力を要する。

まづ農村の疲弊は資本主義經濟の發達の必然的なる結果である。けれども日本に於ては、此自然的傾向が人爲によつて著しく助長せられてゐる。明治政府以來の産業獎勵政策はつねに、農村の犠牲に於て都市の商工業に庇護を與へたと見られてゐる。加之、日本の社會政策がなほ未發達の狀況にあるといふものの、それが都市ことに大都市にあつては相當に考慮せられてゐるのに對し、農村に於ては施設の見るべきものがない、といつても、極論とはいひがたいであらう。かゝる事情の下に於て、農村に人口を一層多く引きとめようとするのには、いふまでもなく、農村の収益を増大せしむる外はない。これには最近まで農村の工業化といふことが最も適切なる方法であると見られてきた。けれども率直にみて、これは果してそれほどの効果をもたらすであらうか。農村にもちこまるる工業が例へば工場の分散を意味するが如きものであれば、それによつて人口の吸収が容易になるにして

も、農村として特色は失はれる。若し此工業が農産物の加工位に止まる間はさやうに多くの人口を吸収する餘地もない。又その一定の地方に於ける確立の爲に販路を開拓するにしても、國家權力の作用を借らざる限り、それは容易のことではなからうと思ふ。部分品の製作を農村の工作によつて營むにしては、かゝる部分的製作が技術的經濟的に許さるるところの工業、従つて生産物の種類に限りがあるであらう。その急速なる實現が如何なる困難を意味するかは、既に現實の示すところである。かゝる事情の下にあつて、人口の農村分散を確實に保證しうるものは何であるかといふならば、一方に於て農村を庇護する社會政策的施設であらうが、他方に於ては大都市への集中を何等かの方法、たとへば工場、官衙、學校等の徹底的なる地方都市への分散によつて防ぐことである。その工夫の詳細なる點については、茲に立入るべき機會ではない。

五

私はなほ人口の階級的分布について考へねばならぬ。これを復民族といふ見地から考へてゆくこと、いふまでもない。これについては、最初に社會の階級的組織についてどういふ見方をとるか、従つてどういふ社會に導いてゆかうかといふ立場に従つて、結論が種々に分れて來るものと思ふ。前にも述べて來たように、階級の勞資への截然たる分化、對立が行はれ、その間の争鬭によつて來るべき社會が來るものとするならば、議論が全く別となる。たゞ民族の立場をとるときには次の如き見方を一應はゆるしてかゝらねばならぬと思ふ。第一に階級の懸隔を出来る丈け取りのぞくといふことが人口の數量的政策の上から見ても必要である。又國民の團結といふ上から考へても、さうでなくては、對外的なる發達が困難とならざるを得ない。第二、如何なる過渡的段階をとつて

考へても、いはゞ此懸隔の取り除かれゆく段階の如何なるものをとつてみても、そこで中間の階級が消滅するといふことは、摩擦を深刻にし、内部の統一を困難にする。此意味に於て今日の中産階級を没落させるといふことは、民族の立場から見てもさけられねばならぬことである。第三に、民族内部に於ける各成員の階級的地位を近づけるにしても、これを如何なる地位に於て、水準に於て近づけるかゞ問題となる。これについては、かつて詳細に説明を加へたることであるからこゝにそれを繰返すまい。

たゞ、此等の三點のうち、別にとり上げて論じようとするのは中産階級の問題である。無産者の地位の向上についてとらるべき社會政策的施設については周知のことを述ぶるだけに止まるであらうから、こゝには立ち入らぬ。以上の理由からして、中産階級の地位について考慮を加ふべしとするならば、その没落しようとする傾向をくひとむる方針をとる外はない。まづ農村に於ける此方針については、小農組織が格別に不利と思はれぬ以上は農村自體の立場を一般的に有利にすることによつて、自作農をの没落から救ふことが出来るはずである。たゞ都市の小商工業については問題が別となる。都市に於ける小商業者の全人口に對する比率が、日本に於ては割合に高いといふ。これは生産力の見地乃至配給組織の合理化といふ見地からするならば、當然に減少せしめられねばならぬであらう。けれども人口吸収乃至民族生命といふ立場からするならば、此高率の商業人口がそのまま維持を必要とするであらうし、その意味に於てこれは一種の失業対策でもあり民族政策でもある。配給組織の徹底的改善は此等の中産階級を無産者となすであらうし、進みては失業者となす危険すらもある。これ丈の小賣商人口を支持するといふことは、國民全部が若干の割高の品物を買ふといふことによつて、いはゞ若干の負擔を忍ぶことによつ

てこれらの人口を支持し、又彼等を中産階級として立たしむるところの小資本を維持することともなつてゐる。さうすると、資本主義經濟の大勢とこれに對する對策といふ二の方面の動きから小商業者が壓迫せらるるときに、國家は之を保護すべき必要に迫られてゐる。かゝる理由から、百貨店の進出問題は利便、廉價といふが如き經濟的觀點を離れて解決せらるべきものである。率直にいへば、百貨店に對する對策に於て國家はすでに若干の立ち遅れをなしてゐる觀がある。其進出擴張に對して十分の對抗策が講ぜられねばならぬと思ふ。これと聯絡をもつものは、産業組合の問題であるが、私はこれについても同様なる立場から答へたいと思ふけれども、これについてはなほ他の見方からの修正を要する點もあるかと思ふから、決定的なる答解を與ふることを差ひかへよう。

小工業については、ことがらがかくの如く單純ではない。これについては一方に次のやうな見方がある。「中小工業は大資本の壓迫の下に没落するかにみえたが、必ずしもさうでないのみならず、日本の産業に於けるその重要性は他の文明國に於けるよりも遙に高い。この點からいふと、日本の中小工業は特別の強味をもち、此位置を資本蓄積の進行に拘はらず、維持しうるものであらう。」これに對して私の考ふところは、次の如くである。なるほど、中小工業として殆どいつまでも存続しうる産業の種類のあることは争ひがたい。けれどもさうでない種類のものについては、かうであらう。日本に於ける中小工業の強味といふものの中には、日本人特有の手先の器用さといふことの作用もあるであらう。けれどもそれは大體に於て、資本が乏しく、勞銀の安いといふことの結果である。日本に於ける産業躍進は結局、資本の蓄積を進行せしめ、いはば此二の基礎を漸次にとり除くであらう。それゆゑに大工業組織による中小工業の驅逐の進行は、大體に於て時の問題であるともみるべきものであ

る。さうすると、此問題について如何なる態度をとるべきであらうか。これについては、小商業の場合と同一の答解を提示しがたいやうである。原則として資源の乏しい日本の産業は少からざる程度に於て外國貿易に依存するのであるが、其結果外國貿易に於ける日本の地位といふことを離れては、工業に關する政策が考へられぬ。結論をいへばかうである。工業のうち、直接に輸出にむけらるる生産物を生産するか、又それらの費用を決定するところの生産財を作るところの産業にあつては、資本相互の競争によつて、優勝劣敗の作用の進行するに委する外はない。此方面に於て一定の干渉を加へ、小企業を保護するといふことは、生産物價格の騰貴を來すこととなるであらう。たゞ國內消費にあてる商品の生産に關しては、小商業に對すると同様の考慮が拂はれて然るべきであらうと思ふ。此條件に適する限り、小工業に對して、あらゆる保護が加はることも、何等それから來る輸出上の影響がないはずである。それから前者に屬する産業にあつても、小企業の困難が生産技術の側に屬せず、むしろ金融や販賣の側に存するならば、國家の権力は此困難の除却の爲に働かねばならず、又働くことによつて、小企業の残存の目的を達成しうるはずと思はれる。たゞ具體的に一々の産業をとつて其何れに屬するかをしらべて來ると、判定の困難なるもの多いことはいふまでもないが、それは自ら本論の範圍以外に屬しよう。

要するに私の立場からすると、人口政策は民族のための政策であり、同時に主として社會政策である。たゞ歐洲流の社會政策ではなくして、根本の原理を異にするものであるとも、いひ得られよう。近頃よく、全體的、又は全體觀的政策といふ言葉が用ひられる。私は此言葉を用ひようとは考へないが、多くの人々が此言葉に與へてゐる意義は私の立場に近いものがある。

最後に二の點を附記して置かう。第一。人口政策は何よりも人口の總量に關する政策である。而してこれについては、來るべき出生率の減少が何よりも大なる問題となる。政策の眼目はこゝに置かれねばならぬ。これが爲には、農村人口のある高さに維持するやうに、つとむる事の必要であるが如く、社會政策的の施設が必要であり、次に國民の生活統制が必要である。又生活様式の統制が必要である。生活水準の上昇は出生制限に新なる動機をつくつり、個人主義的傾向を刺激する。別して、日本が出生制限の傾向に於て遅れ得るとするならば、それは別して家族主義的傾向の故ではないかと思はれる。慣習、生活標準、これらのものと出生率減少の傾向とは、決して無聯絡のものではない。第二。人口政策の質的方面にはふれなかつたがこれが亦重要な一面を形づくる。これには今までの優生學が目ざして來たやうな劣悪者斷種、優秀者増殖といふ方面があり（主として英國に於ける主張）、又今のナチスの考へてゐるやうな血液政策がある。後者は決してそのまゝ日本に採用せらるべきものではないが、種々なる分子の同化問題については、今日の日本に於ても、考慮せらるべき要素がある。これは外地、植民地の人口事情を考ふる場合に別してさうである。けれども、此質的政策は當初から考の外に置いたことであるから、それについては他日を期して論ずることにしよう。（一九三七・六・四・午前）